

坂崎千春

絵本と図書館が大好きだった子供時代、そして
Suicaのペンギンが生まれるまで。



動物が登場するファンタジー好み

絵はあまり得意ではなくて、本を読むのが好きな子供時代でした。繰り返し読んだのは『スノーピー』で、和英併記が勉強にもなりそうだったというところで、父が会社帰りに買ってきてくれたものが家に何冊もありました。ほかには『ドリトル先生』や『エルマーの冒険』『クマのプーさん』のような、動物が出てくるファンタジーが好きでした。

小学三、四年生ぐらいになると、インコが冒険するお話を考えて、それを手づくり絵本みたいにしたことがあります。そんなに凝った造本じゃなくて、ホチキスで止めただけでしたけど。とにかく本が大好きで、図書館によく通っていました。だから図書館の司書さんになりたいと思っていました。本の裏見返しについている貸出用の図書カードが楽しくて、自分の家の本にも付けて、妹に無理やり貸し出して遊んでいましたね(笑)。

中学では週一のクラブ活動で美術のクラスに入り、名画をシルクスクリーンで刷るようなことがありました。ちょうどマリー・ローランサンが流行っていた時代で、版に分けて刷るのが楽しかったことを覚えています。中学の授業では他にも、自分の好きな詩の一節や歌の歌詞など何か言葉を選んで、ポスターをつくったことがあります。イメージを形にするということをお初めて試みて、絵はそんなにうまく描けなくても技術的なことをきちんとやれば、きれいなものができることを知りました。美術がおもしろいなと思ったきっかけですね。ほとぼしる情熱を抱いたアーティストにはなれなくても、本のデザインやレイアウトは訓練を重ねることで、習得できるとなるんじゃないか。いつかそういう仕事に関われるにはデザイン科がいいと、高校時代に通っていた美術予備校の先生にも言われて、藝大を受験したのです。

「紙」という素材に惹かれる

藝大では絵本とカレンダーをつくる授業があって、担当の平野甲賀先生から「これはいいんじゃない」と言われて、初めて認められたと思いました。自分でも「やれた」という感覚があったし、すごく自信になりましたね。カレンダーは、数字をデザインしたもので、一月の「1」の形がペンギンでした。卒業制作も「絵本的」なアプローチのものを二冊つくったんです。エッセイのような繰り返し返しのモチーフを使ったデザイン的なものと、ペンギンをモチーフにした言葉遊びを本の形にしたもの。それを「絵



右：『イラストのこと、キャラクターデザインのこと。』ビー・エヌ・エヌ新社
左：『かぞえてみよう』（こどもMOEのえほん）白泉社

本コーナー」に仕立てた展示もしました。もうひとつ、牛乳パックをほぐして、そこに安全ピンやコイン、それに定期券なんかを漉き込んだものに、コピーみたいな文章をつけ日記みたいにしたものもつくりました。それも先生から「切り口がおもしろいね」と褒められ、「もう少しこうしたほうがいい」とヒントをいただきました。

そんなふうには紙ものが好きだったので、ステーションナリーの会社に入れば自分の得意なことを生かせるかもしれないと思って会社選びをしました。そうして入社したG.Cは、グリーティングカードや便箋、封筒がメインでしたが、ゴフスタインという作家の大人向け絵本も出していたので、もしかしたら自分もそういうのに関われるかもしれないというのもありましたね。この会社では仕事が細分化されていなくて、イラストも描いてデザインもして、紙も選んで印刷の立ち会いにも行きました。つまり商品の全工程に関わるんです。まだバブルの時期だったので、特色六色使用とか、恐ろしいことをやっていた(笑) 小さな工房みたいな雰囲気でした。楽しかったですね。

タイミングよく与えられた転機

会社にいたときに自分がデザインした便箋を見た新潮社の方から会社に連絡があり、この絵を描いた人を装丁に使いたい。そのお話から初めて装画を手がけた『飲食男女』(アン・リー著 南條竹則監訳 一九九五年)の仕事につながりました。本が大好きだったから、自分が描いた絵で関われるならうれしいなと思って、会社を辞めて仕事を受けるようになっていったのです。

会社を辞めて一カ月後に参加したグループ展で、創作絵本の展示をしたんです。自分がつくった絵本を並べて、自由に見てもらおう。そのときに『ペンギンゴコロ』という絵本をつくって、気に入った人が買えるように小さな冊子にしました。それを見た出版社の方が「これを絵本にしませんか」と言ってくれました。そうして退社したのが秋で、その翌年の春に絵本が一冊出たのです。フリーになって三年目に、ペンギンをJRのキャラクターにという話が広告代理店からあって、Suicaのキャラクターになったのです。自分からはあまり積極的には動いていないんですけど、いいタイミングで目をつけてもらえたと思います。

本当に好きなものしか、素敵にはつくれないと思うのですが、自分が得意だと思っていないことでも、ほかの人から認められること、求められたりすることは頑張ってみてもいいんじゃないでしょうか。そういう意見や



「感想に素直に向き合っていくと、道が開けていくときがあるかもしれないという気がします。短所と長所というのは表裏一体で、私の場合、背景を描くのが苦手で、それがコンプレックスでした。だから単品で、そのものだけにクローズアップしたものがかり描いてきました。だから自分が短所だと決めているところに、意外な強みが隠されていることもあるかもしれません。」

さかざき・ちはる
絵本作家・イラストレーター。1967年千葉県生まれ。東京藝術大学美術学部デザイン科を卒業後、ステーションナリーメーカーのデザイナーとして勤務。1998年よりフリーランスイラストレーターとして活動。「Suicaのペンギン」(JR東日本)や「チーバくん」(千葉県)などのキャラクター、「ペンギンゴコロ」(文溪堂)などの絵本、書籍や雑誌の装画など幅広い活動を行う。